

二〇一〇年三月
創立八十周年記念論集

東方學報

京都

第八十五册

京都大學人文科學研究所

**THE
TÔHÔ GAKUHÔ**

東 方 學 報

JOURNAL OF ORIENTAL STUDIES

Kyoto Number 85

March 2010

The 80th Anniversary Volume

THE INSTITUTE FOR RESEARCH IN HUMANITIES
(JINBUN KAGAKU KENKYUSHO)
KYOTO UNIVERSITY

避諱と字音

高田時雄

前 言

避諱は前近代の中國において廣く行われた慣習である。各朝代により回避すべき文字に異同があるのは當然として、施行の嚴格さにおいてかなりの差異があった。しかし避諱が行われなかったことはなく、人々の言語生活の上に頗る大きな影響を與えたことは云うまでもない。回避の具體的な方法としては、同義の文字に改める改字や、文字はそのまま一部乃至最後の一畫を缺く缺筆などが行われたが、時には避くべき文字を書かず空白にしておく空字の方法もあった。今、唐代の一例を挙げると、儀鳳四年(679)に日照三藏(地婆訶羅)が宮中において梵本から譯し、杜行顛が筆受したという『佛頂尊勝陀羅尼經』には、「世尊」を「聖尊」とし、「世界」を「生界」とし、「救治」を「救除」と書いてあるが、當然ながら太宗の名「世民」の「世」字および高宗の名「治」を避けたものであり、これは改字の例である¹⁾。同經にはまた「大勢」を「大趣」と書いてあるが、これは「世」の同音字である「勢」にまで避諱が及んだ例で、嫌名と言われるものである²⁾。闕筆の例は、刊本にも寫本にも數多く確認できるが、やはり文献から唐代の例を拾うと、同じく『隨函錄』の『僧伽吒經』音義に「虎形」を出し³⁾、「上呼古反、獸名、正作虎也。避廟諱故省之」といい、『菩薩處胎經』音義に「處廿」を出し、「下尸制反、正作卅、避太宗諱故闕」とするのがその例である。『僧伽吒經』は北魏の月婆首那譯で、『菩薩處胎經』は姚秦の竺佛念譯であるが、唐代寫本では上のように闕筆されていたことが分か

- 1) 慧琳は貞元十八年(802)その『一切經音義』卷三十五に「記佛頂尊勝陀羅尼經翻譯年代先後」の一文を挿入し、杜行顛筆受の同經が「廟諱國諱之字迴避不書」だと指摘している。
- 2) これらの改字については、五代後晉の可洪『藏經音義隨函錄』にそれぞれ「正作世尊、避廟諱故云聖尊」、「正言世界、避廟諱故云生世也」、「正言救治、避廟諱故云救除」、「正作大勢、避廟諱故云大趣」と説明する。東國大學校影印本第 35 冊、886 頁上。『隨函錄』には現在、増上寺所藏の高麗版を底本として影印した希觀典籍蒐集會本(1934-36年)、及び大日本校訂大藏經(縮刷藏經)音義部(爲帙一至五)に収録された活字本(1885年、弘教書院刊)もあるが、以下『隨函錄』の引用は東國大學校影印本を用い、その頁數を示す。
- 3) 実際には最後の一畫を缺く。印刷の都合で、ここには全形を挙げる。

る⁴⁾。ちなみに「虎」は唐の高祖李淵の祖父の名である。このような改字や闕筆以外に、回避すべき文字はそのまま、別音を用いて読むというケースがあり得るが、説のみあって実際にはその例は稀であるとされてきた⁵⁾。これまで知られている例としては高宗の諱「治」を「理」音に読むというもので、敦煌発見のチベット文字音注『千字文』がしばしば引き合いに出される⁶⁾。これは臨時の読み替えであると一般には考えられているが、小文では改音が決して臨時の措置ではなく、避諱がもたらした新しい字音として可成りな程度定着して用いられたであろうことをここに再度取り上げたいと思う。

治字を理音に読むこと

上に挙げたチベット文字音注『千字文』で、治字に li の音を附してあることについては、筆者はかつてそれが決して臨時の読み替えではなく、一定程度定着した字音であると考えられることを、慧琳音義の音注などによって示しておいた⁷⁾。いまその点を補強するため、更に幾つかの證據を挙げておきたい。

敦煌遺書中の佛教教理問答に「大乘三科(窠)」というテキストが存在する。このテキストには幾つかの異本が存在するが、興味深いことに相互のあいだには様々なレベルの異同が存在していて、敦煌ではこのテキストが一定の形に固定されることなく、流動的な形態で傳承されていたことを想像させる。

ちなみに今日伝えられる文献というものは、それが優れて洗練され一文字たりとも變改を許さないような古典的著作であっても、或いはまた成熟しない表現に満ち、しばしば誤りの含まれるような三流の作品であるとしても、各々それなりにすべて出来上がったものとして我々の前に残されている個々のテキストと相對峙せざるを得ないのが普通である。もちろんテキストの校勘に供されるべき甲本、乙本などの異本が存在する場合も多いし、當該テキストの成立が古ければ古いほど、時代の流れのなかで轉寫、復刻を経るごとに

4) 實際の寫本や石刻などでは、むしろ疋の下が「巾」になっている字體が多く見られ、『干祿字書』にもこの字體を「通」として掲げている。この字體が唐代以前から現れていることからしても、この場合には闕筆ではなく異體字に改めた、改字の例と見なすべきである。『隨函錄』の『瑜伽師地論』卷十八音義ではこの字形の「虎豹」を出し、「上呼古反，山獸之君，正作虎……廟諱，故今作虎（下部巾の字）」として（第34冊1013頁中欄）、「省」とも「闕」とも言わないのがその證となろう。

5) 陳垣『史諱舉例』（中華書局，1962年），8頁。

6) 尾崎雄二郎「談“治”字之讀“理”」『王力先生紀年論文集』（香港：三聯書店，1987年），47-50頁。

7) 拙著『敦煌資料による中國語史の研究』（東京：創文社，1988年），75-76頁。

ヴァリエントの数は増えていく。そういった複数の異本を目の前にしたとき、校勘の目的は常にオリジナルのテキストを復元することである。したがって著者の自筆稿本といったものが存在する場合には、そのテキストの価値はもはや絶対となる。しかしテキストというものは必ずしも単一の著者に由来するものとは限らないし、むしろある種のコミュニティの共通した思想なり理念なりが言語として形作られるような場合を想定することが可能である。その場合、テキストの成立は流動しつつ非常に多様なかたちをとるであろうことも想像に難くないが、言語表現がテキストに固定される過程を目の当たりにすることは、普通の場合極めて難しい。しかしながら敦煌寫本にはそういう意味でのテキスト成立の動態を観察し得る例がまま存在する。この「大乘三科」というテキストはまさしくそういう一例として挙げることができる。

敦煌本『六祖檀經』に「三科法門者、蔭界入。蔭是五蔭，界是十八界，入是十二入。何名五蔭，色蔭，受蔭，想蔭，行蔭，識蔭是。何名十八界，六塵，六門，六識。何名十二入，外六塵，中六門。何名六塵，色聲香味觸法是。何名六門，眼耳鼻舌身意是。法性起六識，眼識耳識鼻識舌識身識意識」とあるのは三科の定義を下したものとして注意される。これに従えば、三科とは即ち蔭，界，入の三者であって、より具體的には五蔭，十八界，十二入であり、それぞれの細目は上に述べられたとおりである。ちなみに、ここに用いられる用語のうち、五蘊を五蔭，十二處を十二入，六境を六塵，六根を六門とするのはすべて舊譯に従っているという⁸⁾。類似のテキストとして「小乘三科」というものが別に存在し、やはり同様の佛教教理問答であるが、その構成において、「小乘三科」は最初に「三寶，四諦」を掲げるのに對し、「大乘三科」は、いまここに提出するテキストがそうであるように、「三界，五趣，如自法，心性法，心境法」などが説かれるという相違がある。「大乘三科」冒頭の「念不起坐，見本性禪云々」の句は『六祖檀經』の「念不起爲坐，見本性不亂爲禪」に合致する點から、「大乘三科」は「小乘三科」よりも『六祖檀經』とより密接な関係があるとされる⁹⁾。さて今このテキストのうち、我々に關係する箇所として以下の一節を拾い上げ、四種の寫本を對照して掲げてみよう。

(a) P 3861 「離有，離无，自性離（ ）。「自性共甚離？」「本來離。」「本來共甚離？」「畢竟不說……」

(b) P 3215 「利有，利无，自性利故。「自性共甚利你？」「本來利。」「本來共甚利？」「畢竟不說……」

(c) P 3373 「裡有，裡无，自性治苦。「自性共甚治？」「本來治。畢敬不說……」

8) 田中良昭『敦煌禪宗文獻の研究』（東京：大東出版社，1983年刊）357頁以下を参照。

9) 田中良昭前掲書，364頁。

(d) C 131 li 'i'u li wu/dzi zye li khu / dzi zye gyung zhi lyi/bun la'u lyi /bun la'u gyung zhim lyi/'pyir gye pu shwar

(e) C 131 「離有，離无，自性離苦。」「自性共甚離？」「本來離。」「本來共甚離？」「畢竟不説……」

(d) は大英図書館所蔵のチベット文字轉寫「長卷」¹⁰⁾ の一部（表面 251～253 行）で、ここではチベット文字をローマ字に書き換えてある。さらにそれを漢字に還元したものが (e) である。以上 5 種の寫本のうち、文字遣いが正しいのは (a) で、これを最初に出したが、(b) (c) の寫本では頻繁に異體字の使用が見られる¹¹⁾。さてこれら各寫本のうち、(a) で三箇所に出現する「離」字が、(b) (c) ではそれぞれ「利」「治」と書かれている。(a) の「離」が正しいことは言うまでもなく、これは藏文轉寫の (d) で li 或いは lyi と寫されていることでも支持される。つまり (c) の「治」字は chi 音ではなく、li 音を記しているものでなければならないが、これは安定した字音として治字に li 音がなければ考えにくい。藏文轉寫『千字文』では「治」字に li 音が附されているのは、一時的な讀み替えと考えられなくもないが、この場合には反對に li 音を寫すのに「治」字が用いられているわけであるから、もともと「治」字に li 字音がないと困るわけである。

いま更に同様の例を敦煌寫本中から拾ってみよう。俄藏敦煌文獻 Dx 278 V (1) の『好住娘・入山讚』に「舍卻治氈錦褥」という一句が見える¹²⁾が、他の個所の「舍卻金盤銀盞」を勘案すると、「治」はやはり li 音で、たとえば「麗」のような語を寫したものだと考えられる¹³⁾。S 1947 背面 (1) の「唐咸通四年癸未歲（公元八六三年）敦煌所管十六寺和三所禪窟以及抄錄再成氈數目」に「緋治氈一領」が見えるが、これも同じく「緋麗氈一領」であるに違いない。

また P 2040 背面「淨土寺諸色入破曆祿會稿」に「修治佛手塑師及羅筋匠，染布匠等用」

-
- 10) 拙文「チベット文字書寫「長卷」の研究（本文編）」『東方學報・京都』第 65 冊（1993 年 3 月）340-341 頁。
- 11) これらの寫本のテキストは異體字のみならず、構文にも大きな相違が見られて興味深い、それについては別稿を用意したい。
- 12) 全文は以下の通り：Dx 278 V (1), 25-41 行『好住娘・入山讚』「好住娘，且須師僧戒伴，好住娘，舍卻金盤銀盞，好住娘，且〔須〕鉢盂昔（錫）杖，好住娘，曹（槽）頭龍馬，娘（好）住娘，且須虎狼師子，舍卻治（麗）氈錦褥，好住〔娘〕，且須亂草一束，好住娘，佛道不遠回心至，好住〔娘〕，今身努力孟絕看，好住娘。入山讚文。」ちなみに〔 〕内の文字は原寫本になく、筆者が補ったもので、（ ）内の文字は直前の文字をこのように讀み替えるべきもの。
- 13) もし「治」が「麗」字の別字として用いられているとすると、これは止攝と蟹攝の間での韻攝を超えた通用例となるが、蟹攝の齊韻字は藏文轉寫資料の新しい層やコータン文字による轉寫資料ではすでに -i となっているので、決して不可能な通用ではない。

とある「修治」はおそらく「修理」であって、「治」はliに讀んだものと思われる。敦煌寫本には他にも「料治」「療治」「療治」などの語詞が頻見するが、これらはすべて「料理」を表しているものと見なければならぬ。同じく中國國家圖書館所藏 8347 (生 25) 背面「宋開寶八年 (975) 三月一日鄭醜撻出賣宅舍地基與沈都和契」に見える「若右 (有) 親因 (姻) 論治此舍來者, 一仰丑撻竝隣 [近] 覓上好舍充替一院」の一文中的「論治」もやはり「論理」と讀んだものと思われる。これらはすべて「治」字にliの音が定着しておればこそこの用字である。

「治」字の避諱は公式には貞觀二十三年 (649) から元和元年 (806) までとされる¹⁴⁾。上に援用した敦煌寫本はすべて避諱の下限よりかなり時代が下るものである。その意味では最早「治」字の使用に拘束を受けないわけで、この字が多数出現することは異とするに足りない。しかし避諱によって生じたli音が定着して、そのまま長く用いられ続けているという事実のほうにこそ、注意が向けられるべきである。一詹讀み替えられた字音は、避諱が必要でなくなった後にも用い続けられたのである。

俗諱の一例

「治」字の場合は高宗の諱を避けたいいわゆる國諱だが、避諱が字音に影響を及ぼした別の事例として俗諱の一例を取り上げたいと思う。それは「裸 (裸, 裸)」字の場合である。

慧琳『一切經音義』卷一百「惠超往五天竺國傳」中卷音義に以下のようにいう。

【裸形】魯果反。赤體無衣曰裸, 或從人作裸, 或從身作裸, 今避俗諱, 音胡瓦反, 上聲¹⁵⁾。

俗諱を避けて、本來の魯果反の音 (すなわちら) ではなく、胡瓦反の音 (クワ乃至ワ) に讀んでいるというのである。では俗諱とは何かということになるが、『隨函錄』にその説明がある。

【裸形】上郎果反, 俗謂陰囊爲裸也。古文作胞, 像形字也。『說文』「赤體。裸, 裸也。」

又肥, 是身之少分, 亦不合偏露其裸也。今宜作裸, 音蹠, 裸即全體無衣也¹⁶⁾。

すなわち郎果反の音は俗に陰囊を指すので、それを避けるため「裸」字の音の聲母を讀み替えて「蹠」音に讀むというのである。「蹠」は『廣韻』胡瓦切であるから、慧琳の言う音と一致する。「古文作胞, 像形字也」というのも「俗謂陰囊爲裸」と関連しての説明であることは言うまでもないが、基づくところは不明である。『說文』「赤體」云々というもの

14) 陳垣前掲書 76 頁, 尾崎前掲論文 48 頁。

15) 大正藏第 54 冊, 927 頁中欄。

16) 『隨函錄』第二十五冊「新華嚴經音義下卷」音義。東國大學校影印本第 35 冊, 524 頁中欄。

不明。『説文』では「裸」字は「羸」字の重文として掲出されているのみで、その説解に「赤體」の二字は見えない¹⁷⁾。「又肥」も不明だが、續けて「身之少分」とあるのを見ると、文字の誤りの可能性が高い。これについては後で述べる。『隨函録』のこの個所は、慧苑『新譯華嚴經音義』の文字に對する更なる音義であるが、「裸」の異體字「裸」「倮」を含む以下の語句を前後更に二個所出している。

【裸露】上郎果反，隱處也，俗爲惡口也。又按倮是身之少分也。今宜作裸，戶瓦反¹⁸⁾。

【倮袒】上戶瓦反，下音但¹⁹⁾。

さて「身之少分」というのは、手足や頭など胴體以外の部分を指す佛教語であるらしい²⁰⁾。上の「裸露」の説明によれば、身偏の「倮」字は、そういった意味であるから、「裸」字の本義には合致しないので、よろしく「裸」字に作り、戸瓦反に讀むべきだということである。先に挙げた例で「身之少分」の意味だという「肥」字は、或いはその上に古文として挙げられている「胞」の誤りかも知れない。とすれば要するに胴體以外の部分である。ちなみに可洪『隨函録』が音義を附した慧苑の音義そのものには以下の一條が見える。これには胡寡，力果の二音を出すが、胡寡を先に掲出しているところを見ると、盛唐頃にはすでにこの音が行われていたことが分かる。さらに中算(934-976)『妙法蓮華經釋文』中卷の「裸」字條に「慈恩云」として「借音胡瓦反」とあるので、この俗諺による讀み替えは慈恩大師大乘基(632-682)の時代まで遡ることが可能である。

【倮】胡寡，力果二切。『玉篇』曰：「倮袒也。」字又从倮裸兩體²¹⁾。

『隨函録』には更に以下の説明があり、郎果反が誤りで、胡瓦反に讀むべきことを繰り返している。

【赤倮】戶瓦反，全身無衣也，正作裸也。又郎果反，俗謂陰形爲倮也，非用也²²⁾。【膽倮】上徒早反，下胡瓦反，偏露其體也。正作袒裸也。又上七余，七慮二反。下諸家經音竝作郎果反，非也，二竝同²³⁾。

17) 『説文解字』八篇上「羸，袒也。从衣羸聲郎果切。裸，羸或从果。」可洪はこの「赤體」を繰り返して引用していることからすると、單なる誤りではなく、むしろ彼の用いた『説文』が現行本とは異なる本であったと考えるべきであろう。

18) 影印本第35冊，522頁上欄。

19) 影印本第35冊，522頁下欄。

20) 湛然『止觀輔行傳弘決』卷第十一「分與有分一者，分謂手足頭等身之少分，有分謂身身有手足等分故也。」

21) 慧苑『新譯華嚴經音義』卷下「經卷第四十七，佛不思議法品之下」道光乙未年歙縣徐寶善刊本第5葉背面。

22) 『隨函録』第十冊「憂婆塞戒經」第四卷音義。東國大學校影印本第34冊，979頁上欄。

23) 『隨函録』第二十一冊「道地經音義」。東國大學校影印本第35冊，329頁中欄。

『隨函錄』中には「裸」字の例がすこぶる多く、ここに全ての例を掲げる餘裕はないが、幾つか他の箇條を引用しておこう。

【裸者】上胡瓦反，正作裸，倮二形。又郎果反，『説文』云「赤髀，倮裸也。」風俗以爲惡口也²⁴。【倮形】上戸瓦反，淨也，無衣也，正作裸也。又郎果反。『説文』云「赤髀，倮裸也。」南方謂惡口也，非此呼²⁵。

上にも郎果反のラ音について「俗爲惡口也」と説明してあったが、ここでも同様の説明があり、「南方謂惡口也」と特に南方においてこの音が「惡口」に使用されることを指摘している。この種の言葉が罵言に用いられていたというのはごく自然で理解しやすい。

やや時代の降る例として、希麟『續一切經音義』の例を挙げよう。

【裸形】上華瓦反，本音郎果反，爲避俗諱，作上聲。顧野王云：「脫衣露袒也。」『説文』「從衣果聲。」案拆衣半上半下，果在中，卽爲裏，併衣在一邊，卽爲裸，會意字也。經文從示作倮，意灌，非此用也²⁶。

また希麟と同じく契丹で作られた『龍龕手鏡』には

【倮】郎果，胡瓦二反，露體也。

【裸】郎果反，赤體也。又胡瓦反。

とあり、郎果反と胡瓦反の二音を並記している。もっとも佛典音義や佛家の手になる辭書では、かなり強固な傳承性を推測させることから、これらの例によって、俗諱を避けた字音がどれほど廣く、かつまたどれほど後の時代まで実際に行われていたかを知ることは難しいかも知れない²⁷。反對に、郎果反という本來の字音が決してなくなってはいないことの方に注意が向けられるべきである。つまり俗諱を避けた胡瓦反の字音はとどのつまりは借音であり、本來の字音に取って代わったのではないということである。

最後に『隨函錄』に見える関連する俗諱の事例を挙げよう。第十冊「菩薩地持經」卷十の音義である。

【兩圓】或作圜，同于拳反。天體也，核也，廡也。正言廡，避俗諱，故作圓也。廡戸官反²⁸。

24) 『隨函錄』第三冊「虛空孕菩薩經」上卷音義。東國大學校影印本第34冊，721頁下欄。

25) 『隨函錄』第九冊「蘇婆呼童子經」上卷音義。東國大學校影印本第34冊，953頁上～中欄。

26) 卷四「大乘瑜伽千鉢文殊大教王經」卷第十音義。大正藏第54冊，952頁上欄。希麟の『續音義』には「裸」字を含む掲出語は、この「裸形」以外に、「裸者」「裸露」など計五條見え、その説明はそれぞれ若干異なるものの、ほぼ同じであるため、ここではこの箇條のみの引用に止めた。

27) 管見の及ぶ範囲では、例えば磧砂版卷末音義でも「【倮裸】二同胡瓦反，又郎果反」（『摩訶僧祇律』第二卷）、「【裸】胡瓦，郎果二反」（同第六卷）とある。

28) 影印本第34冊，977頁上欄。

ここでは廻が俗諺に当たるので、その音「戸官反」を避け、喻母字の「圓」を用いたという説明である。ところで廻は『廣韻』に「丸屬」(胡官切)といい²⁹⁾、『玉篇』丸部にも同じく「丸屬也」(胡官切、又如之切)とある。これは『説文』の「丸之熟也、从丸而聲、奴禾切」を承けたもので、段注によるとその意味は「俗にいわれる圓熟で、轉がりやすいことを言う」³⁰⁾のだとする。また徐灝の『注箋』が「現在廣東地方の風俗で手で物を丸く轉がるようにすることを廻というが、俗に掬とも書く」³¹⁾と言っているのも同じ意味であり、掬は「奴禾切」の音に對應する。『説文』以下の字書や韻書にははっきりと書かれていないが、「戸官反」乃至「胡官切」の音がやはり擧丸をあらわす語であることは容易に推測できよう。したがって俗諺を避けて「圓」と書いたのである。

それを檢證するためには『隨函錄』が音義を施した對象である北涼曇無讖(385-433)譯『菩薩地持經』にまで遡ってみる必要がある。「兩圓」はその卷十に現れ、佛陀の八十隨好の内に數えられている。

八十隨形好者、手足二十爪指、手足八處表裏平滿、兩踝、兩膝、兩髀、兩肩、兩肘、兩腕、兩股、兩臀藏相、**兩圓**、兩膂、兩脇、兩腋、兩乳、腰背心膂咽腹、悉皆妙好、是名咽已下六十種好。上下牙齒、兩脣、兩斷、兩頰、兩鬢、兩眼、兩耳、兩眉、鼻孔、額兩角、是名咽已上二十種好。

さいわいこの部分は玄奘譯『瑜伽師地論』中に異譯が存在するので³²⁾、その説くところを照らし合わせてみると全體の60種の數は一致するものの、一々については必ずしも一致しない。しかし『菩薩地持經』の「兩圓」というのが玄奘の「兩核」に相當することはまず間違いのないところで、その「兩核」に對して實法師の『四分律飾宗義記』³³⁾は「核謂卵也」と注している。ちなみに八十種好のうち該當する語を、南朝宋の求那跋摩(377-431)譯『菩薩善戒經』では「腰奇中」という表現を用い、北宋の施護の翻譯になる『佛說法集名數經』では「隱處」としている³⁴⁾。したがって曇無讖の「兩圓」と譯した「圓」は、唐

29) 『廣韻』上平二十六桓韻。『廣韻』にはまた上平七之韻「丸之熟也、又丸屬」(如之切)、上平八戈韻「丸熟」(奴禾切)も見える。

30) 「俗所謂圓熟、言旋轉之易也。」

31) 「今粵俗以手搓物使圓轉曰廻、俗作掬。」

32) 卷四十九。大正藏第30冊、567頁上欄。「云何如來八十隨好。謂兩手足具二十指及以節爪、並皆殊妙、是即名為二十隨好。兩手兩足表裏八處、手四足四、並皆殊妙、是即名為八種隨好。兩踝膝股六處殊妙、是即名為六種隨好。兩臂肘腕六處殊妙、是即名為六種隨好。腰縫殊妙、各一隨好。兩核殊妙、為二隨好。陰藏殊妙、為一隨好。兩臀殊妙、為二隨好。臏臚膂三並皆殊妙、各一隨好。兩脇腋乳並皆殊妙、為六隨好。腹胸項脊、各一隨好。如是所說、除頸已上、於下身分六十隨好。」(いま六十隨好だけを出す。)

33) 大正藏第42冊、208頁中欄。

34) 大正藏第17冊、661頁中欄。

代に「裸」の郎果反の音を避けて胡瓦音に讀んだのと、まったく軌を一にし、戸官反の音を避けて于拳反に讀んだのである。もちろんこの場合には短く見積もっても裸字の場合とは250年以上の開きがある上、同じ俗諱でも避ける言葉が異なっている。さらにこの場合には必ずしも字音に與えた影響というのではなく、單なる俗諱による書き替えの例である。ただこの種の俗諱が少なくとも佛教教團の中ではかなり嚴格に遵守されていたことを知り得る。

小 結

避諱の方法として別音を用いるという方式は多くないというこれまでの定説に對し、本稿では「治」字の字音が避諱によって本來の字音以外に、かなりな程度固定したli音を獲得し、廣く用いられていた事實を指摘するとともに、「裸」字の場合にも、少なくとも佛教教團では、本來のラ音ではなく、俗諱を避けたクッ音が用いられていた事例を、『隨函錄』などの佛典音義によって取り上げた。ただこれらの字音は最終的には打ち捨てられ、本來の字音が復活しているという事實もまた無視し得ない。避諱による字音は、一定程度の安定性を持ったとはいえ、本來の字音に取って代わることはなかった。この邊りには字音の規範性とそれを支える字書や韻書の存在を考えねばならないであろうが、それは小文の範圍を逸脱するので、機會があれば別途言及したいと思う。

A Study of the Iconographical Compositions of Yungang Cave 6

— Focusing on the Reliefs with Scenes from Buddha's Life

Fusae ANDO

Among the Yungang 雲岡 Caves which were excavated during the Northern Wei 北魏 (386 – 534) dynasty, Cave 6 is one of the most problematic one, and has been discussed for a long time.

In Cave 6, there are various scenes from the life of Buddha depicted on the central pillar and sidewalls surround it in a complicated iconographical composition. In these reliefs, Chinese style garments appear for the first time in the history of Yungang Caves.

In this article, I focus on the reliefs of scenes from Buddha's life in Cave 6, and make a comparison with other works in detail. As a result, I make it clear that there can be seen influences from the Liangzhou 涼州 style Buddhist images and Yungang Cave 7 • 8.

Sound Changes to Avoid Using Taboo Characters

Tokio TAKATA

It has been recognized so far that sound change was not used in order to avoid using a taboo character. Nevertheless the character 治, name of the Tang emperor Gaozong, was read as *li* instead of *chi*. It is attested in the Tibetan transcription of the very character in the Dunhuang manuscript text of the Thousand Character

Classics. Furthermore the pronunciation *li* was not a temporary substitute but used as one of the stable pronunciations of the character. It can be confirmed by the frequent use of the character for substituting other characters of li pronunciation in Dunhuang manuscripts. In addition to the character 诘, we can find another example of sound change, in this case to avoid using a secular taboo. The character 裸 is often indicated to be pronounced as *hwa* instead of *lwa* in a few collections of phonetic and semantic glosses for the Chinese Tripitaka, such as Kehong's *Zangjing Yinyi Suihanlu*. The pronunciation *lwa* could mean "testicles" and had to be avoided, especially in Buddhist societies. These two characters, being rare examples of sound changes to avoid using taboo characters, deserve more attention.

The Tōhō Gakuhō Journal of Oriental Studies (Kyoto) No. 85 (2010) 692 ~ 674

Notes on Ni-shu

Minoru INABA

The word Nezak and the appellations containing it are considered to be a clue for elucidating the complicated political circumstances of East Iran and Central Asia after the collapse of the Sasanian Empire. Two Chinese words have been assumed as transcriptions of Nezak, one of which is Na-sai and the other is Ni-shu. The validity of the identification of the latter with Nezak is discussed in this paper through the consideration of the way of composing titles and appellations in Pre-Islamic Central Asia together with the analysis of the political landscape of the western part of Central Asia in the 7th century. It is concluded that Ni-shu and Nezak might be different transcriptions of the same word, which will help us to consider how the minor tribal groups and city-states had survived under the hegemony of powerful empires or confederations such as the Hephthalites and Western Turks.